

2020. 8. 30 (日) マタイ22:15~22

22:15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにしてイエスをことばの罠にかけようかと相談した。

22:16 彼らは自分の弟子たちを、ヘロデ党の者たちと一緒にイエスのもとに遣わして、こう言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。

22:17 ですから、どう思われるか、お聞かせください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか。」

22:18 イエスは彼らの悪意を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか、偽善者たち。

22:19 税として納めるお金を見せなさい。」そこで彼らはデナリ銀貨をイエスのもとに持って来た。

22:20 イエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像と銘ですか。」

22:21 彼らは「カエサルのです」と言った。そのときイエスは言われた。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

22:22 彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

<説教>

ユダヤ人の宗教指導者たち—祭司長たちやパリサイ人たち—からすると、イエスは自分たちの質問にはまともに答えず、それどころか自分たちを断罪し、自分たちの気に入らないことばかりを言う、ますます憎むべき者でした。

何とかしてイエスを捕らえたいと思うのですが、なかなか良い機会が得られないでいました。

また、そこにはイエスをそれなりに支持している群衆の存在もありました。

それでもイエスが何とか捕まるようにしたいということで更に悪知恵を働かせ、行動します。

そしてパリサイ人たちが動きました。

22:15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにしてイエスをことばの罠にかけようかと相談した。

22:16 彼らは自分の弟子たちを、ヘロデ党の者たちと一緒にイエスのもとに遣わして、こう言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。

22:17 ですから、どう思われるか、お聞かせください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか。」

ルカ 20:20 には、「さて、機会を狙っていた彼らは、義人を装った回し者を遣わした。イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。」と書かれています。

パリサイ人たちはイエスをことばの罫にかけ、イエスのことばじりをとらえてイエスを捕まえ、当時ユダヤ人を支配していたローマ帝国の総督（ピラト）の支配と権威にイエスを引き渡して殺そうと企（たくら）みました。

そのためにパリサイ人たちは、ローマ帝国に納める税金を問題にしました（「カエサル」とはローマ帝国の皇帝ことです）。

そしてその税金について考えの違うヘロデ党の者たちと手を組みました。

パリサイ人たちはローマ帝国に税金を納めることには反対の立場でした。

ローマ帝国に税金を納めることは、ユダヤ人民衆にとっては経済的負担であり、また異邦人の支配者ローマに屈していることを認めざるを得ない精神的・宗教的苦痛だったからです。

それでもさすがに露骨に逆らうことはできませんでしたからしぶしぶ納めていたのでしょう。

一方、ヘロデ党はその名の通り、ヘロデ大王の家系、ヘロデ家の勢力をもう一度取り戻そうという人々で、そのためにはローマ帝国に積極的に従って税金も納めてカエサルの心証を良くしておこうという立場でした。

そういう思想信条の違う人々が反キリストという点では一つになってイエスを試みたのでした。

さてパリサイ人たちはわざわざ弟子たちをイエスのもとに遣わしました

それはおそらく、初心者たちの純粋な質問のようにイエスに見せかける策略だったのでしょう。

そして彼らには言うべき台詞（せりふ）も吹き込んでおきました。

「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。」と。

事実、イエスは彼らがこのように言った通りのお方でした。

しかしここでは、それは単なるお世辞であり、こう言えばイエスが気を良くして、どう思っているか本当のことを言うだろう、しかももしかしたら何か口を滑らせるかもしれない、そのとき、そのことばじりをとらえようということだったのでしょう。

そうやってイエスに向けられた質問は、「カエサルに税金を納めることは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか。」ということでした。

カエサルに税金を納めるべきだとイエスがもし言えば、「それ見ろ。イエスはユダヤ人のくせにローマの側について税金を認めたぞ。私たち同胞を裏切ったぞ。これのどこがメシヤだ、何がダビデの子だ、預言者だ。」とパリサイ人たちが騒ぎ出して、群衆にも知らせ、そうしてイエスの人気があた落ちになる、と見込んだのでしょう。

反対に、もしイエスが税金を納めるべきではないと言えば、ヘロデ党の者たちが騒ぎ出し、ローマ帝国・カエサルに対する謀反・反逆者として時の総督ピラトに知らせて捕まえてもらおうということだったのでしょう。

ルカの福音書の書き方からすれば、パリサイ人たちはこちらの可能性が高いと見ていたのかも知れません。

始めの、あのお世辞のような言い方も、「あなたはばりばりの正統的ユダヤ人ですよ。ね。ならばこのさい、ローマ帝国の税金について思っていることを過激に言ってしまいなさい

い。」とけしかけているようにも聞こえます。

とにかく、どちらにしてもイエスを不利な立場に追い込んで、何とかしてイエスの息の根を止めてしまおうとの魂胆でした。

そういう彼らの浅はかな悪意をイエスはもちろん見抜いておられました。

22:18 イエスは彼らの悪意を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか、偽善者たち。

22:19 税として納めるお金を見せなさい。」そこで彼らはデナリ銀貨をイエスのも手に持って来た。

22:20 イエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像と銘ですか。」

22:21 彼らは「カエサルのです」と言った。そのときイエスは言われた。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

22:22 彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

このたびの策略を考えたパリサイ人たちも民族的また宗教的誇りにかけて本当は異邦人のローマ帝国・カエサルに税金など払いたくなかったのです。

でも自分たちの命が惜しいし、またローマの支配下とは言え、今の身分地位が惜しいのでしぶしぶ、カエサルにへつらって税金を納めていたのでしょう。

そんな卑屈で惨めな彼らをまるであざ笑うかのようにイエスは彼らを偽善者と言ひ、そして“明るく”お答えになったと思います（「さてこれは難問だ、困ったぞ。どうやってこの窮地を脱しようか。」と言うのでもなく）。

ローマ帝国発行のデナリ銀貨には皇帝の顔と名前が刻まれていました。

「これはだれの肖像と銘ですか。」「カエサルのです」とはそういうことです。

誰かがもし何か落とし物を拾った場合、そこに持ち主の名前が書いてあればその物の持ち主が分かるので、それによって持ち主に返してあげなければなりません。

ちょうどそのように、税として納めるお金にはこれはカエサルのものだと書いてあるのだから、カエサルがこれは自分のものだと言っているのだから、ならカエサルに返してあげたらいいだけのことで、あなたがたは何を青筋立てているのか。

そんなふうにイエスは、「税金は納めるべきだ」と明るくお答えになりました。

もちろんその深いところではローマ書13章でパウロが言っているような納税の意義をイエスこそは弁えていました。

しかし、ここでは彼らの悪意に凝り固まった陰湿な誘導尋問に対する答えとしては、込み入った納税論議など不要で、「カエサルの名前が書いてあるのだからカエサルに返しなさい」の答えで充分だったのです。

むしろここでは、悪意ある質問をわたしにしてきたあなた方にはもっと大事な問題があるとイエスは言われたのです。

それが「神のものは神に返しなさい」ということです。

カエサルに返すべきお金にはカエサルの「肖像」「かたち」が刻まれているので、カエサルのものだとわかるし、だからカエサルに返すべきだということでした。

そのことからすると、神に返すべきものとは神の肖像、神のかたちが刻まれていること

になります。

となればそれはもう人間ということになるのです。

「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」(創世記 1:27) と書かれているとおりです。

ここではイエスは、税金問題を“出し“にしてイエスを攻撃し、イエスに逆らっている彼らパリサイ人たちが、神に返すべき神のものを神に返していない、神に逆らっている、だからわたしによって悔い改めること、神に立ち返ることこそがあなたがにとって一番大事な問題だと言われたのです。

カエサルへの税金について、あなたがたは異邦人の支配下にあることを嫌がっているが、一方で自分たちが今異邦人の奴隷のようになっている現実を直視しないで「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。」(ヨハネ 8:33)と誇っているのは一体どうしたことか。自分たちの神に対する不信仰に気付かず、自分たちの律法のわざに頼り、わたしイエス・キリストによって悔い改めようとしなかったことか。あなたがたは、わたしを通してまず自分自身のうちに神のかたちを回復すべきである。そうやって自分自身を神にお返しして、お捧げすべきである。そうするほかに救いはない。

そうイエスはお答えになったのです。

「見えない神のかたち」(コロサイ 1:15)、「神のかたちであるキリスト」(Ⅱコリント 4:4)によって私たち、全ての人間—罪人—は回復され、救われ、そして自分自身を神にお返しして、神にお捧げするのです。